平成28年度 神戸市婦人団体協議会合同研修会

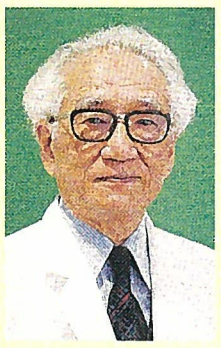
「平成28年度神戸市婦人団体協議会合同研修会」が9月23日午後1時半から、神戸文化ホール中ホールで開かれました。社会医療法人大道会森之宮クリニック（ＰＥＴ画像診断センター）の高見元敞特任所長が「がんと分かったとき、あなたはどうしますか～セカンドオピニオンをふくめて～」と題して、パワーポイントを交え講演。高見先生からあらためて原稿をいただきました。

がんを恐れ過ぎないで

講演　「がんと分かったとき、あなたはどうしますか ～セカンドオピニオンをふくめて～」

早期発見なら生存率高い

社会医療法人大道会 森之宮クリニック（ＰＥＴ画像診断センター）
高見 元敞 特任所長



たかみ・もとひさ　1936年1月1日生まれ。61年信州大医学部卒。66年大阪大大学院博士課程修了（癌治療学、医学博士）。その後、大阪大医学部（文部教官）、市立豊中病院病院長、市立柏原病院総長などを経て、2006年社会医療法人大道会森之宮クリニック（ＰＥＴ画像診断センター）所長。16年同特任所長就任。

これまで日本胃癌学会、日本消化器外科学会、日本大腸肛門病学会、日本消化器内視鏡学会、日本臨床外科学会、日本消化器病学会などの評議員を歴任。専門領域は消化器がんを中心とした悪性腫瘍の診断と治療（外科学、内視鏡診断学）。

主な著書・論文に、臨床医のための「ＰＥＴ／ＣＴによる悪性腫瘍の画像診断」（共著：南江堂）▽21世紀の病院医療～病院経営とリスクマネジメント（共著：南江堂）など。

状態や治療法 冷静に相談を

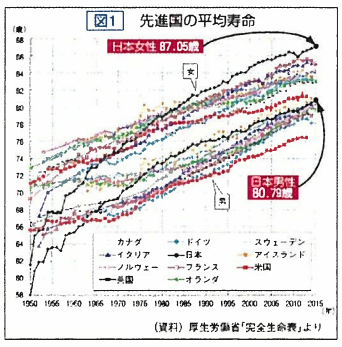
神戸製鋼時代にラグビー日本選手権で7連覇を果たし、かつてのラグビー日本代表監督でもあった平尾誠二さんが、がんでなくなりました。平尾さんの命を奪った病気は「胆管細胞癌」。現役のラガーマン時代、平尾誠二さんは並はずれた体力と強靭な精神力の持ち主でしたから、まさか彼ががんで死ぬなど思いもよらなかったでしょう。約1年間の闘病生活だったそうです。

少し前ですが、女優の川島なお美さんも若くして胆管のがんで命を落としています。胆管のがんは膵臓癌とともに早期発見が難しく、治療が困難です。がんの治療は日進月歩ですが、克服への道のりは、まだまだ遠いのです。

それでもがんは怖くない

このように書くと、がんの怖さばかりが強調されるのですが、実はがんはそれほど恐ろしいものではありません。なぜなら、心臓や脳血管の病気に比べて、突然に死んでしまうことはないからです。狭心症や脳出血のように、家族に何も言い残すことなく死ぬことの方がよほど怖い。がんの場合、仮に手遅れであったとしても、亡くなるまでには時間があり、ゆるやかに最後のときを迎えることができます。

いま、日本は世界で最も長寿を誇る国になりました（図1）。がんの多くは高齢者の病気ですし、日本人の2人に1人ががんになる時代です。怖がってなどいられません。



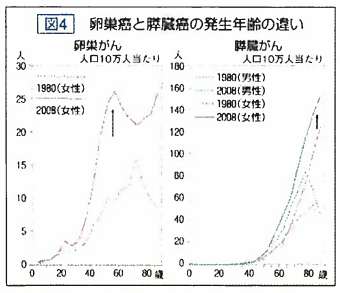
怖いがんと怖くないがん

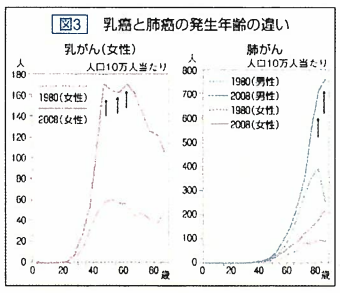
最近では、検診などで初期のがんが見つかるようになりましたから、早く発見しさえすれば、がんで死ぬことなどありません。ただし、先ほど述べた平尾誠二さんの例のように、極めて治療が難しいがんがあるのは事実です。がんの種類によって、治療成績が良いがんと悪いがんがあることだけは知っておく必要があります（図2）。

今回の講演を聴きに来られたほとんどの方は女性ですが、この表をよく見てください。女性のがんの代表である乳癌は、治療後の生存率がきわめて良く、男性の前立腺癌と同じく、治療を受けた多くの人が長生きできます。また、子宮癌や大腸癌の治療成績も向上しています。がんは決して怖い病気ではないことが、お分かりでしょう。

図2　治療成績の良いがんと悪いがん
治療後どれくらい長生きできるか
・5年生存率での比較（大阪府立成人病センター　2016年報告）

乳癌	90.9%	卵巣癌	57.7%
前立腺癌	97.5%	肝・胆管癌	35.0%
子宮癌	75.5%	食道癌	33.4%
大腸癌	70.2%	肺癌	28.3%
悪性リンパ腫	64.2%	……	……
胃癌	62.3%	膵臓癌	8.7%！





乳癌は若くて発生

乳癌は自分で発見できるがんです。それなのに、自分の体に無関心な人があまりに多いのです。テレビや新聞では、なぜか手遅れになった人の情報ばかりが話題になります。しかし、自分の手で触り、きちんと検査を受けさえすれば、手遅れになどならないのです。

データを紹介しながら「がんは怖くない」と解説する森之宮クリニックの高見元敞特任所長＝神戸文化ホール

乳癌は、卵巣癌などとともにかなり若いころ（40～50代）から発生するという特徴があります。がんの発生年齢を、男性に多い肺癌や最も予後の悪い膵臓癌と比べると、その違いは一目瞭然です（図3、4）。

これは、国立がんセンターのがん研究振興財団が毎年出しているデータですから、ネットでも見ることができます。大きさが1㎝以上の乳房のしこりは、自分でも触れば分かるはずです。もちろん、しこりのはっきりしないがんも無いわけではありませんが、それを見つけるためにこそ乳癌検診があるのです。

がんと分かったとき

以前と違って、いまではがんの患者さんに"その病名"を告げることはなくなりました。患者さんに対して、きちんと告知をするのが当たり前になったのです。告知にあたっては、患者さんがショックを受けないように、やんわりと「がんの疑いがありますから詳しく調べましょう」と告げ、患者さんに考える余地を残してあげます。

もちろん、一口にがんと言っても、ごく初期のこともあれば、かなり進行している場合もあり、また、がんが発生した場所によっても対処の仕方が異なります。それでも、多くの人は、がんと聞いただけで死の宣告を受けたように思い、頭の中が真っ白になると言います。

大事なことは、がんと聞いても決してあわてないこと。医師の説明をよく聞き、がんの進み具合（ステージ）をよく説明してもらい、その上で初めて、どのような治療があるのか、落ち着いて相談すればいいのです。

講演　「がんと分かったとき、あなたはどうしますか ～セカンドオピニオンをふくめて～」

セカンドオピニオン

最近、がんを宣告された患者さんが、セカンドオピニオンを求めることが増えてきました。診断はもとより、これから受ける治療が本当に正しいのか、他の医師に確かめたい気持ちは誰にでもあるでしょう。

ところが、セカンドオピニオンにはいくつかの問題があります。最初に受けた説明とセカンドオピニオンの内容が異なる場合、どちらを選択すべきか判断を迫られます。そして、迷いだしたらきりがありません。

当たり前のことですが、セカンドオピニオンを求める場合、相談の相手が誰でもいいわけではありません。がんに関するしっかりした見識（新しい知識も含めて）を持った医師を選ぶことが条件です。セカンドオピニオンの結果、適切な治療を受け、がんを克服した患者さんは稀ではありません。でも、そのような条件に恵まれた患者さんが少ないのも事実です。ウインドー・ショッピングのように、第3、第4の意見を求めて、大事な時間を浪費することにもなりかねません。

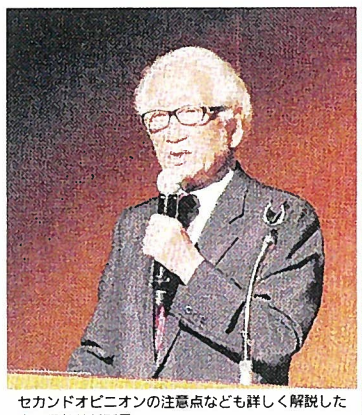
重要なのは、何よりも自分の判断です。最終判断は自分以外にないことを覚悟した上でセカンドオピニオンを求め、間違っても友人、知人たちが勧める誤った情報に左右されないことです。

手遅れにならないために

がんを怖がってはいけないと述べましたが、それには手遅れのがんにならないことが条件です。乳癌はもとより胃癌や肺癌でも、初期のがんは、見つけさえすれば、それほど心配はいりません。初期の胃癌や大腸癌の多くは、内視鏡治療で治すことができますし、これまで難治だとされてきた食道癌でも、早く見つければ内視鏡や放射線治療で治る見込みがあるのです。乳癌も、早く発見できれば、局所的な治療で完治できるのです。昔のように、乳房を全部取ってしまう手術は極めて限られた場合だけです。

正しい情報持った医師探そう

最終判断は自分自身で



セカンドオピニオンの注意点なども詳しく解説した高見元敞特任所長

ところが、今でも手遅れに近い状態で病院を訪れる患者さんがあとを絶ちません。

乳癌とともに増えてきた大腸癌でも同じことが言えます。最近、日本を代表するピアニストの一人だった中村紘子さんが、大腸癌で亡くなりました。がんが発見された時はかなり進んだ状態だったそうです。

その一方で、肺や肝臓にまで転移した大腸癌を患いながら、それを克服している鳥越俊太郎さんのような人もいます。前立腺癌をホルモン治療と放射線治療でコントロールし、地球一周を走りきった間寛平さんも話題を集めました。決してがんを恐れることはないのです。

がんの新しい診断 ～ＰＥＴ検査

これまでサイレントキラーと言われてきた卵巣癌や膵臓癌は、なかなか見つかりにくいのが難点です。

最近では、超音波検査やコンピューター断層撮影（ＣＴ）、磁気共鳴画像装置（ＭＲＩ）などに加えて、がんに集まる薬剤を用いた「ＰＥＴ（陽電子放射断層撮影）／ＣＴ検査」が診断の精度を高めるのに役立っています。がんの広がりや、転移の有無を調べるのにはＰＥＴ／ＣＴ検査が極めて有用です。

例えば乳癌では、図5のように、いろいろな場所に転移しますが、全身を一度の検査で映し出すＰＥＴ／ＣＴでは、図6や図7に示したように、わきの下のリンパ節転移や骨の転移も発見が可能です。

ＰＥＴ／ＣＴで映し出されたがんの画像を見ていただきましょう（図8、9）。黄色に光って見えるのががんの部分です。一度の検査で全身を画像として捉えることができますから、体の中に同時に発生した多発がんを見つけ出すこともあり、医師だけでなく患者さんにとっては大きなメリットがあります。ここでは肺癌・下咽頭癌・結腸癌がＰＥＴ検査で同時に見つかった重複例や、胃癌と直腸癌の同時重複例などを挙げておきます（図10、11）。

おわりに

がんの診断と治療はこれからもますます進歩するでしょう。がんと分かった時に大事なことは、あわてずに、きちんとした情報を得た上で行動することです。ここまで読んでいただいて、がんが怖くなくなればしめたものです。

2度も救われた私の命

「私は10年前にセカンドオピニオンの機会に巡り合いました」

今から10年前、私は進行性大腸がんと診断され、開腹手術を受けました。

がんが見つかったのは、それまで通院していた病院ではありませんでした。前の病院でいくら診てもらっていても一向に病状が改善しなかったので、セカンドオピニオンを選び、森之宮クリニックの高見先生をご紹介いただき、ＰＥＴ検査を受けました。

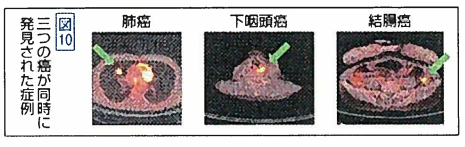
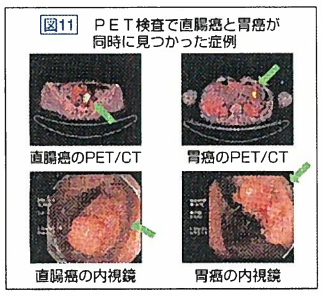
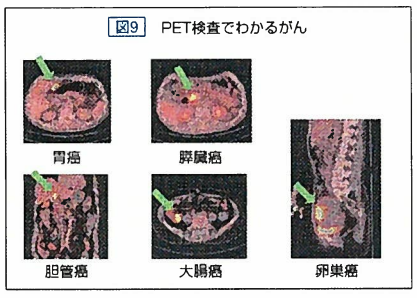
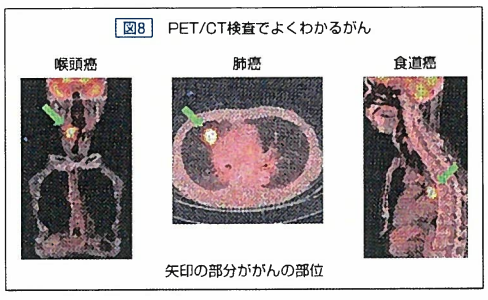
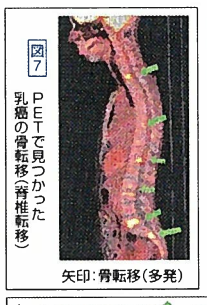
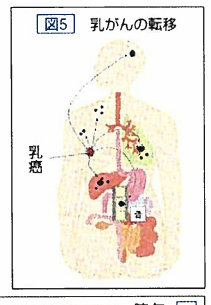
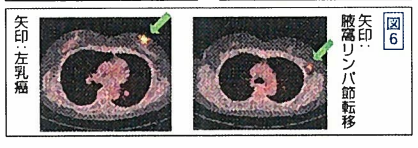
結果、私の体にはもう内視鏡では取ることのできない大きながんができていることが分かりました。高見先生の迅速な手配で、がん発見から2週間ほどで開腹手術を受け、助かりました。高見先生からは「あと半年発見が遅れていたら、田中さんは今この世に存在しなかったかもしれません」と優しい笑顔で告げられました。思い切ってセカンドオピニオンを選んだ結果でした。

現在まで10年間は再発もなく過ごしてきましたが、今年4月に前立腺がんが見つかりました。私は前立腺肥大症があり、前立腺の腫瘍マーカーで年に2、3回検査をしていただいていました。2年半前から腫瘍マーカーは正常値4を超え、1年前には6となりました。泌尿器科の先生に何度も「大丈夫ですか」とお聞きしましたが「大丈夫です」の一点張りでした。

10年前の経験から、私は2度目のセカンドオピニオンに挑戦し、また高見先生にご相談し、新しい泌尿器科の先生をご紹介いただき、精密検査を受けたところ「プリソンスコア9」という悪性度の高いがんが見つかりました。高見先生と主治医の先生でご相談いただき、私の前立腺癌に適した治療が始まりました。主治医の先生が「悪性度の高いがんですが、発見が早く初期ですから95%以上の確率で完治可能です」とのお言葉をいただき、家族一同明るい気持ちで新年を迎えられそうです。

今回もしセカンドオピニオンに挑戦していなかったら、と思うと、恐ろしくなりました。セカンドオピニオンに挑戦する勇気が大切です。自分の命ですから勇気を持って挑戦してみてください。

「セカンドオピニオン」
株式会社フジ取締役会長　田中 米治氏（72）

ＰＥＴ（ペット）検査についてのお問い合わせは
社会医療法人大道会 森之宮クリニック
（ＰＥＴ画像診断センター）
〒537－0025　大阪市東成区中道１の３の15
フリーダイヤル：0120・756・489まで

ＰＥＴ検査 高い診断精度
転移の有無など全身を確認